

# ステファニー・ランド『メイドの手帖』を 通して見る現代アメリカの貧困層

大 塩 真夕美

はじめに

かのマーティン・ルーサー・キング牧師はこう言った。「平等とは尊厳であり、尊厳には一週間続く仕事と給与がいる<sup>1)</sup>。」私たちの多くにとって、「一週間続く仕事と給与」とは、手に入れるのにさほど難しいことではないかもしれない。しかし、世界で最も裕福な国の一つであるアメリカ合衆国では、「一週間続く仕事と給与」をひたすら切実に望む人々が多数いるという現実がある。上位1%が全米総資産の30%を占めるアメリカには、想像できないほどの資産を保有するほんの一握りの人間がいる一方で、一週間分の仕事とその対価である給与さえまならない多くの人々が存在する。事実、2005年の調査によると、アメリカの総人口の約13%にあたる約3700万人が、連邦政府の定める貧困ライン（4人家族で年収約1万9971ドル）以下の生活を送っており、その多くが政府の定める最低賃金（時給5.15ドル）を下回る低賃金で、福利厚生や医療保険もないままに働いている<sup>2)</sup>。

低賃金で働く貧困層は、朝から晩まで働き詰めで、生きていくために、ただひたすら仕事をするしかない。最低賃金の仕事したところで、一日生きていくには足りず、多くがダブルシフトで昼夜問わず仕事をする。このような状況の中、2019年、ある一人の女性が、自らの体験を綴った回想録を出版する。*Maid: Hard Work, Low Pay, and a Mother's Will to Survive*<sup>3)</sup>（以下、『メイドの手帖』）と題されたこの本は、たちまちベストセラーとなった。著者であるステファニー・ランドは、自らがひよんなことからシングルマザーとなり、恋人と暮らした家を追い出され、ホームレスシェルターでの生活を余儀なくされ、それでも負けることな

く、必死に働いた。その生活を、ブログで書くことで、自らを支えた。その本は、全米でたちまち話題となり、『ニューヨーク・タイムズ』紙の「サンデー・ブック・レビュー」にも取り上げられた。

But her book has the needed quality of reversing the direction of the gaze. Some people who employ domestic labor will read her account. Will they see themselves in her descriptions of her clients? Will they offer their employees the meager respect Land fantasies about? Land survived the hardship of her years as a maid, her body exhausted and her brain filled with bleak arithmetic, to offer her testimony. It's worth listening to<sup>4)</sup>.

その年の夏には、バラク・オバマ元大統領が近年毎年発表する「サマー・リーディング・リスト」の一冊にもランクインし、その後、彼は2019年の年間推薦図書にも、この本をランク入りさせた。その人気は衰えることなく、2021年には、Netflixでドラマ化製作が決まっている。『メイドの手帖』が多くの人々に読まれた理由には様々なものがあるだろう。しかし、その一部に、ミドルクラスの人々の、自らも簡単に貧困層になってしまうという漠然とした恐怖感があるのではないかと指摘する声がある<sup>5)</sup>。

アメリカにおけるヒスパニック系メイドの実情を描いた *Maid in the USA* の著者メアリー・ロメロは同書の中で、1990年代までのドメスティックワークの歴史を振り返り、彼女が1980年代にヒスパニック系ドメスティックワーカーの研究調査を始めたころは、彼女らの存在は社会の中で、見えない存在であったと指摘している<sup>6)</sup>。本来、「階級」がないとされてきたアメリカにおいて、アメリカ人は階級を語ることをことさら拒否し続けてきた。それは「見たくない」ものであり、同時に「見えない」ものであった。しかし、その後、2000年代に入ってから、アメリカの人々は、経済的格差に目を向け始めた。その始まりは、2001年にジャーナリストのバーバラ・エーレンライク自らが、低賃金の労働環境に身を置き、その労働と生活をルポルターージュした『ニッケル・アンド・ダイムド：アメリカ下流社会の現実』<sup>7)</sup>の出版であるといえる。この出版によって、それまでの「見えない」人々の生活に脚光が当たっ

た。その後も低賃金で働く人々に焦点をあてた研究書や書籍が出版され、近年では、ジョン・C・ウィリアムズの『アメリカを動かす「ホワイト・ワーキング・クラス」という人々：世界に吹き荒れるポピュリズムを支える“真・中間層”の実体』やデイヴィッド・K・シプラーの『ワーキング・プア：アメリカの下層社会』など、「見えざる」人々への視点が増えてきている。日本でも話題となったJ・D・ヴァンスによる『ヒルビリー・エレジー：アメリカの繁栄から取り残された白人たち』<sup>8)</sup>も、生活を苦にする人々を語っているという点において、また、そのような回想録がアメリカ人の多くに読まれたという点において、階級を語る研究書として認識してよいだろう。この流れは、「アメリカ社会が当然視してきた自助の努力と経済的成功という勤労の美德では乗り越えることのできない、厳然とした階級格差が社会に根付いていることを白日のもとに晒すことになった<sup>9)</sup>」といえるだろう。

栗原武士は、「アメリカ労働者階級研究のいま：その歴史的経緯と将来的展望」で、アメリカ労働者階級研究の歴史的経緯を詳述している。彼は「アメリカ労働者階級研究」を、労働者研究、労働史及び労働者の歴史研究、社会史研究、そしてアメリカ研究の4つにわけ、その歴史の中で、「経済的不均衡という、階級（格差）の存在を批判的に考察する研究は、それほど多くされてこなかったことがうかがえる<sup>10)</sup>」としている。それを踏まえて、栗原は、労働者を研究するためには、彼らの「労働」だけでなく、労働以外の日常生活をも注目し、その生活、言語、視点が階級にどのように影響するのかを問うべきだとし、さらに、労働者たちの日常的体験を包括的にとらえるために、彼らがどのように表象されているかを研究する重要性を訴えている<sup>11)</sup>。また、シプラーも、「ほとんどあらゆる家族にとって、貧困の構成要素は経済的でもあれば心理的でもあり、個人的でもあれば社会的でもあり、過去のことであれば現在のことでもある<sup>12)</sup>」と指摘している。

このような状況で、『メイドの手帖』が出版された。エーレンライクは、本来、作家という知識階級でありながら、貧困層の実情を知るために、自らの立場を偽って、労働現場に潜入し、その実情を世に知らしめた。エーレンライクは大変な労働環境で仕事をしたが、やめようと思えば、いつでも、本当の自分の家に帰ることができたし、このまま一生働き続けるのかと将来に絶望することもなかった。つまり、『ニッケル・

アンド・ダイヤモンド』に描かれるのは、貧困層の労働者を外側から観察する視点であった。しかし、『メイドの手帖』は、貧困層の労働者自身が、自分の実体験を、内側から描いたものであった。つまり、自分のために、娘のために、どんなつらい仕事もやめることはできず、どんなに過酷な住環境でも耐えるしかなかった、実際の労働者が自らの声、言葉、そして視点で綴った回想録である。この『メイドの手帖』を通して、現代のアメリカの貧困層の生活の一端を考察することが本稿の目的であり、また、彼らが「見えない存在」として、近年、ポピュラー文化の中で、どのように表象されてるのかについても考えていく。

### 過去のメイド像

メイド<sup>13)</sup>は古くから、中流家庭及び富裕層家庭において必要不可欠であった。イギリスにおいては、貴族社会という社会システム上、貴族の生活にメイドは必要不可欠で、文学作品及び映像作品においても、多く表象されてきた。1989年に発表されたカズオ・イシグロの小説『日の名残り』は1993年に同名で映画化<sup>14)</sup>された。1950年代のイギリス貴族の館を舞台に、その執事の視点で物語は進む。貴族社会を描いた作品は多い中で、メイドに脚光をあてた映像作品の中では、最も有名であるといえるだろう。アカデミー賞においても作品賞や脚本賞を含む8部門にノミネートされた。その後、2001年には、ロバート・アルトマン監督が『ゴスフォード・パーク』<sup>15)</sup>を制作。1932年、イギリス郊外のカントリーハウス「ゴスフォード・パーク」を舞台に、そこにやってくる上級階級の人々やハリウッドの映画人などの「アップステアーズ（階上の人々）」と、カントリーハウスのメイドや屋敷を訪れるゲストが連れてきた付き人たち、つまり「ダウンステアーズ（階下の人々）」が入り乱れる群像劇で、両者の複雑に依存しあう人間関係を描いている。両作品ともに、メイドを自尊心を持って働く存在として描いている。階上の人々が不自由のないように準備を整え、さらに無謀な要求にも黙々と応え、地味ではあるが清潔な制服に身を包み、自分に与えられた仕事を完璧にこなす。一方で階下に戻れば、メイド専用のダイニングルームで、主人の無謀さについて同僚と愚痴もこぼせば、自分たちの部屋でルームメイドでもある同僚と恋の話もする。彼らの中には、代々、貴族の館の

メイドとして働く者もおり、自尊心を持って自らの仕事を勤める。

このような階上と階下の人間を描く映像作品は2010年イギリスで放送の始まったドラマ『ダウントン・アビー：華麗なる英国貴族の館』<sup>16)</sup>の登場でさらに人気となる。同作品は2010年にイギリスで第1シーズンが放送開始され、その直後から大人気となる。その後、2011年にはアメリカと日本で放送が始まり、2015年にシーズン6を持って放送を終了した。社会現象になるような人気となり、このドラマシリーズに関連するイギリス貴族のドキュメンタリーの放送や、日本においては、同作品の撮影地を巡るツアーなども開催されるなど、英国貴族ブームを巻き起こした。その人気は放送終了後も止まず、2019年には映画版が製作された。1910年代から20年代のイングランドの貴族の館「ダウントン・アビー」にある館を舞台に、そこに住むクローリー一家と、そのメイドたちの姿を、史実や社会情勢を背景に綿密に描いており、視聴者は、この作品から貴族社会のあらましや、階下の人々の仕事と生活を全52話を通して十分に楽しんだ。全二作品と同様、『ダウントン・アビー』においても、描かれるメイドたちは気高く、仕事にプライドを持ち、家主との主従関係も良好で、古き良きメイドの生活が描かれる。これからのメイドを描いた作品から、私たちは、富裕層家庭で働くメイドに対して、以下のようなイメージを固定化してきたといえよう。屋敷から与えられる制服に身を包み、与えられた仕事を黙々とやり遂げる。基本的に住み込みの仕事の為、最低限の住居スペースは確保され（同僚と相部屋のこともあるが）、食事も屋敷で、メイド専用の料理人が料理したものを食べることができる。威厳と自尊心を持ってできる仕事である、というのが一般的なイメージであっただろう。

### 『メイドの手帖』で明らかになる現代の貧困

バーバラ・エーレンライクが実際に労働者階級のふりをして挑んだ潜入レポである『ニッケル・アンド・ダイヤモンド』は衝撃的であった。エーレンライクは、ふとしたことから、貧困層の実体を知るために、実際に自らが、その世界に飛び込んで、貧困層の生活を体験することとなる。彼女はそのため、フロリダ州キーウエストでダイナーのウェイトレスとして働き、メイン州ポートランドでホームクリーニングをする掃除婦を

体験し、ミネソタ州ツインシティでウォルマートの婦人服売り場の店員として働く。キーウエストで早速仕事を見つけようと求人広告を手にし、求人先に連絡をしまくったエーレンライクが、まず理解したことは、「求人広告」は、あくまでも雇用側の保険に過ぎないという事実だった。つまり、一般的に低賃金労働者は離職率、あるいは移動率が高いため、突然仕事を辞めることが多い。そのため、雇用側は、そのような事態にすぐに対応できるよう、常に求人広告を出し、面接で採用された人間には、仕事が準備できたら、すぐに連絡をするという、人材を確保しておくのだ。そのため、雇用される側は、生活のためにすぐに仕事が欲しくても、すぐに給与を受け取れる保証がないために、いくつもの求人に対し、面接を受けるなどして就職活動をするはめになる<sup>17)</sup>。

同書で、エーレンライクは潜入ルポの形をとって、貧困層のリアルをアメリカ社会に提示した。しかし、2019年にベストセラーとなったステファニー・ランドの『メイドの手帖』は、よりシビアな貧困層労働者の現実をアメリカに伝えた。ランドの貧困層のシングルマザーとしての生活は、2008年に始まった。シアトル近郊の街で一緒に暮らしていた娘の父親であるパートナーと関係を解消し、1歳になる娘を連れて、家を出て、ホームレスシェルターで生活した。2010年頃からは、政府の公的支援のもと、カビの生えたアパートで生活し、その日の食料を得るために、清掃会社に登録し自宅のメイドとして働いた。当時の生活をランドはこう語る。

They [the customers] worked to pay Classic Clean, who paid me just above minimum wage, to keep it all spotless, in place, acceptable. While they paid for my work like some magical cleaning fairy, I was anything but that, shuffling through their house like a ghost. My face had an ashen hue from a lack of sun, dark circles under my eyes from a lack of sleep<sup>18)</sup>.

ランドは、幼い娘と暮らすカビの生えるアパートの賃貸料、最低限のものしか買えない生活費、そして仕事に行くためのガソリン代を支払うために、メイドとして働く。彼女はいつも頭の中で、その月に、どのくらい収入が入るのか、どのくらい支出があるのかを計算し、プラスにはな

らない収支に頭を悩ませる。彼女たちにとって、マクドナルドでの食事は御馳走で、娘を満腹に食べさせるために、自らはコーヒーを飲むだけで腹を膨らませる。彼女が職場にいつも持っていく昼食は手っ取り早くエネルギーを補給できるピーナッツバターとジャムを挟んだサンドウィッチと、ピーナッツバター味の栄養バーのみだった。

貧困層労働者にとって、どれほど日々の収入が大切であるのかわかるのが以下のエピソードである。どこに出かけるにも、ガソリン代を計算するほどの金銭的な余裕のない生活を送っていたある日、清掃の予約をしていることをすっかり忘れた顧客がいた。ランドにしてみれば、わざわざガソリン代をかけてその家に赴き、その清掃ができなければ往復のガソリン代だけが無駄になり、まったく収入が入ってこない大損となった。2週間後、再び清掃のために同じ家に赴くと、前回のことを大変に申し訳なく思ったその家の主人が、彼女にお詫びのしるしにシアトル・マリナーズの試合のチケットを2枚差し出した。いくら無料のチケットをもらったとしても、そこに行くまでのガソリン代と球場の駐車場代を払うことはできないとわかっていたランドは、丁寧にその受け取りを拒む。すると、彼は、ランド自身が使用しなくても、チケットを売ってくれてもいいから受けとってほしいという。チケットをありがたく受け取った彼女は、翌日の午後、その2枚のチケットをインターネットの広告サイトに掲載した。買い手はすぐに見つかり、待ち合わせ場所に現れた買い手は、喜んで2枚のチケットに60ドルを支払った。その買い手は、そのチケットは息子の4歳の誕生日のプレゼントであるといい、大変楽しみにしている様子だった<sup>19)</sup>。買い手にとっては、生活を潤す余暇に支出する60ドルであったが、ランドにとっては、娘とやっとの思いで暮らす生活にとって、かけがえのない60ドルであった。

『メイドの手帖』でランドが綴るのは、エーレンライクのように、逃げ帰る場所のある労働者の世界ではない。排泄物で汚れた便器を目の前に、ただ黙々とそれをきれいにし、シャワールームの鏡を会社から支給される洗浄力の弱い洗剤で掃除するため、できる限りの力をふり絞って時間内で清掃をするために慢性の体の痛みを抱えても、その仕事から逃げ出すことはできない生活である。その目の前の仕事をしなければ、彼らは家を失い、食べることができず、場合によっては、政府の援助も打ち切られる。『メイドの手帖』では、このように、どんなに頑張っても

最低限の生活さえ送ることのままならない様子がひたすらに詳述される。

## ミドルクラスと貧困層の境目

幼い子供と自分の生活を守るために日々必死で働くランドが、自らはミドルクラスの家庭で育ったという事実は、『メイドの手帖』が多くの読者を得た理由の一つであろう。ランドは、ワシントン北部の街で育った。必要最低限のものが足りないという経験はなく、自分と弟は、「信仰と両親の経済的安定 (our religion and my parents' financial security<sup>20</sup>)」に守られて育ったと回想し、こう続けている。“Safety was instilled in me. I was safe, and never questioned that, until I wasn't<sup>21</sup>.” これまでのメイド像は、ランドのそれとは異なるものだった。例えば、英国の貴族の館でメイドを勤める者は、親もメイドであったことが多かったし、19世紀末のアメリカの都市における富裕層家庭のメイドたちは、着の身着のまま、仕事を求めてヨーロッパからやってきた移民だった。また、90年代以降にアメリカで急増したメイドは、ヒスパニック系や黒人などのマイノリティが多かった。しかし、ランドは、白人であり、また、ミドルクラスで育ってきたアメリカ人である。ミドルクラスで両親や祖父母の愛情を受けながら育ってきたランドが、少しずつのボタンの掛け違いで、予期せぬ妊娠からシングルマザーとなり、子供の父親に住む家を追い出され、離婚した両親にはそれぞれに別のパートナーがいるために、完全に頼ることはできず、結果、ホームレスシェルターで生活をする貧困層に瞬く間になってしまう。これは、21世紀の貧困層の話だ。19世紀の移民の貧困、20世紀のマイノリティの貧困が、21世紀の現在には、ミドルクラスで生まれ育った白人でさえも貧困になりうるという事実を見せつけたのが『メイドの手帖』であった。アメリカ人の多くは、その危機感を持って、本書を読んだはずである。

## 公的援助と就職

ある公共政策シンクタンクの2002年の報告によると、貧困層が仕事を見つけると、フードスタンプや医療保険といった公的支援を受ける権利を失ってしまうため、結局のところ、仕事が見つかったところで、仕

事がない時よりも、暮らし向きが良くなることはないという<sup>22)</sup>。この状況は近年も変わっておらず、2017年に出版された『アメリカを動かす「ホワイト・ワーキング・クラス」という人々』の中で、ウィリアムズが指摘するのは、アメリカにおいては、一定の所得レベルになると福祉制度からはじき出されるという現実だ。例えば、オバマケアの制定により、貧困層が医療保険に加入できるようになった一方で、白人労働者層が支払う保険料は値上がりしたという事例である<sup>23)</sup>。この現実のもとには、ある一定の貧困層は、働くよりも、公共政策を受け取ることができるぎりぎりのラインを計算し、公的支援に頼ったほうが、暮らし向きが楽になることが言える。しかし、アメリカの特に伝統的なピューリタンの考え方においては、勤勉さは単に実利的な側面だけでなく、道徳的でもあるので、勤勉さの欠如は、倫理的墮落を意味するという<sup>24)</sup>。つまり、アメリカ社会で生きていくためには、働く必要があるのだ。『メイドの手帖』のランドも働いた。彼女には夢があった。まだ子供を授かる前、彼女には、モンタナ州ミズーラの大学でクリエイティブ・ライティングを学ぶ夢があった。しかし、予期せぬ妊娠でその夢は目の前から消えてなくなった。そのため、貧困の中でも、ランドには、常にその追い求める夢があり、そのために、自分を鼓舞して日々を生活していた。彼女にとっての日常は、ただぎりぎりの生活費で日々をやり過ごすのではなく、少しでも暮らし向きをよくして、この生活スタイルから抜け出すことであった。

アメリカ人が、勤勉性を尊み、政府の援助を受けることを疎んでいる姿は『メイドの手帖』にも描かれている。ランドのクライアントのドナが、掃除中のランドと会話をしている。これから買い物に行くのだが、今回は、いつもの大きな店にはいかずに、コープに行くという。その理由を尋ねると、ドナはこう言った。“Last time I went to the big store, I got in line behind a Mexican family,” she said. “They used food stamps to pay for their food. And those kids were dressed to the nines!”<sup>25)</sup> このドナの発言からは、子どもを着飾らせる余裕があるのに、自分たちの税金から支払われている政府の援助であるフードスタンプを使って食料を購入する貧困層へのいら立ちや嫌悪感を、人々が抱えていることが窺われる。また、この場面では、自分の家を掃除しているメイドであるランドがフードスタンプで食料品を買っていることなど、ドナ自身は想像

もしていないこととも興味深い。

ランド自身、フードスタンプで買い物を買ませたところ、年配の男性に、カートの中を見られ、“You're welcome! <sup>26)</sup>”と声をかけられた体験を綴っている。その男性は、ランドの使用するフードスタンプと彼女の買い物かごの中身を見て、彼女がそのような商品を買うことができるのは、自分たち「一般の市民」が立派に税金を払っているからなのだ、とあえてフードスタンプを使用する本人を皮肉ったのだ。生きるためには、政府の援助を頼ることが必要な時もあるが、それを利用するには、人々の視線が常に注がれている現実もある。ランドは、自分がそれを利用する立場から、利用する側の感情を描いている。彼女らは狡猾にフードスタンプを利用しているわけではない。その背景には、低賃金で働き、精神的にも肉体的にも不健康になりながら、自尊心と希望を持って、必死に生活を送る人々がいる。

### 「見えない」存在のメイド

『ニッケル・アンド・ダイムド』によれば、全米あるいは国際的に展開するホーム・クリーニングサービスは、1970年代以降に起こったものだという<sup>27)</sup>。1999年には、メイドを雇う家庭は14%から18%に上昇し、その中でも、月に1回以上の割合で家事を「外注」する家庭の数は1995年から99年の4年間で53%の上昇をした<sup>28)</sup>。また、1998年の労働統計局の報告によれば、アメリカにおける家内労働者の数は約55万人であるが、これは事実にはかけ離れているとエーレンライクは指摘する<sup>29)</sup>。なぜなら、それらの多くは、統計上には実際のところ表すことのできない不法移民が多く存在するからだ。つまり、公の経済からは、メイドは「見えない」存在であることがわかる。

メイドが「見えない」存在であるのは、経済的な面だけではない。ランドは、自らを「名もなき幽霊<sup>30)</sup>」だと感じている。例えば、ランドが契約していた「クラシッククリーン社」での仕事の多くが、午前9時以前、あるいは午後3時半以降には働くことのない仕事だった。つまり、彼女は、その家の子どもが学校に行った後、あるいは夫妻が仕事に行った後、自宅を訪問し、すべての掃除をし、壁を磨き上げ、子供が帰宅する午後3時半までには、家を後にするのだ<sup>31)</sup>。また、クライアントは、

「クラシック・クリーン社」という清掃会社との清掃契約をしているため、自分の家を清掃する担当者が変わっても、報告を受けることはないし、また気が付くこともない。この点においても、メイドは、「見えない」存在であることが窺える<sup>32)</sup>。

メイドが「見えない存在」あるいは「幽霊」であることは、映像作品にも表象されている。2017年に公開されたジョーダン・ピール監督作品の『ゲット・アウト<sup>33)</sup>』は、ホラー及びコメディ映画<sup>34)</sup>として公開され、その絶妙なレイシズムの扱い方が大きく評価された<sup>35)</sup>。ある黒人の写真家クリスが、白人の恋人ローズの実家に招待される。クリスは自分が黒人であることを意識し、NY郊外の白人の金持ちが住む住宅地にある彼女の実家に行くことをためらっているが、ローズは、両親は大変リベラルで、クリスの人種など全く気にしていないから気を楽しませてほしいという。実際に訪れてみれば、確かにローズの両親はクリスを大歓迎で温かく迎え入れ、最高のもてなしを受ける。翌日には、ローズの親戚が集まる恒例のパーティーが開催され、その親戚や近所の人々にさえ、クリスはむしろ黒人であるからこそ、称賛のまなざしで人々から好意的に受け入れられる。誰もが、クリスに好意を示し、二人の交際を歓迎する中で、歓迎の感情を表さない、むしろクリスの目には不気味なほどに、無感情に映るのが、庭師のウォルターとメイドのジョージナであった。この二者はある理由があって、感情を無くしているのだが（ネタバレになるため、ここではその理由はあえて詳述しない）、登場人物の中で、感情を無くした二人をその邸宅で働く庭師とメイドに設定しているのは、興味深い。これは、人々の意識の根底に、私宅で働くメイドや庭師、清掃夫は、表に出ることのない、人間としての感情のない、見えない存在で構わないという意識があることの表れではないか。

また、2020年のアカデミー賞を外国語映画として初受賞し、世界中で大変話題となった『パラサイト』<sup>36)</sup>もメイドを「見えない」存在として描いている。監督のポン・ジュノは、韓国で社会問題の一つとなっている富裕層と貧困層の格差の問題を独自の視点で描いたわけだが、この映画における「見えない」存在はキム家の以前にパク家で家政婦をしていた女性の夫グンセ、そして、実際のキム家である。グンセは、借金取りから逃げるため、地下シェルターとして建設されていたパク家の地下にかくまわれている。そこに彼がいることを知っているのは、パク家の

家政婦である妻のみ。家政婦である妻は、主人たちにとって「見えない」存在である夫に、ひそかに食事を運ぶ。パク家の豪邸は、建築家である前の持ち主が建てた家で、家の照明でさえ完璧に計算されつくした設計で、人が階段を上るときには、自動で灯りがともる設計になっていた。しかし、作中で明らかになるのは、その照明さえ、実は、階上の足跡を聞きながら、階下のゲンセが手動で操作していたのだ。「見えない」存在のゲンセは、その家においてなくてはならない存在なのに、主人たちには、まったく気が付かれない存在として描かれている。そして、自らの正体を偽ってまで、半地下での生活を少しでも良くしようと、パク家のメイド、運転手、家庭教師などになってパク家に寄生＝「パラサイト」しようとするキム家の人々でさえも、町中の「半地下の部屋」で暮らす彼らの本当の姿や生活は、パク家の人々にとって「見えない」あるいは「見たことのない」存在である。この作品は韓国の作品である故、必ずしもアメリカの社会状況とは同じではないが、他人の家で働くメイドが、どのような存在であるのかは、アメリカのみならず、世界のほかの地域でも、同様の受け入れられ方をしていることの表れであるように思える。

また、2000年代に入って、ハリウッドでは『私がクマにキレた理由』<sup>37)</sup>など、数々のナニー（子守り）を主人公にした映画が作られた。また、プラム・サイクスの *Bergdorf Blondes*<sup>38)</sup> も大変人気を博した。その多くが、夏休みの間のアルバイトとして気軽な気持ちで富裕層家庭の子守りをしてみたら、その富裕層の雇い主、つまり、その家の妻たちの我がままに振り回され、大変な思いをする、というコメディ要素の強い映画になっている。また、HBO 製作の『ビッグ・リトル・ライズ』<sup>39)</sup> は、カリフォルニア州モンテレーを舞台に、現代の富裕層の母親たちの生活が描かれるドラマであるが、ここで描かれる数々の豪邸の生活において、子守りは稀に登場はするものの、メイドが家を掃除している様子は、まったく描かれない。それなのに、家はいつもモデルルームのように完璧だ。このように富裕層の家庭を作品の中心に据える映画の多くが、ナニーを描くのに対し、本来であれば、そのような家庭には必須であるはずのメイドは描かれないことは大変興味深い。これは、自分たちの子どもとじかに触れあうナニーに比べ、自分たちのトイレを掃除し、風呂場にたまった髪の毛を取り除き、散らかった居間やキッチンを掃除するメ

イドたちは、自分たちの目に触れない「見えない」存在であることの、また、そうであって欲しいという願望の表れであると考えられる。

つまり、近年の映像作品においては、メイドは「見えない」存在として描かれており、あるいは、社会で「見えない」存在であるがために、映像作品においても、描かれることがない。『メイドの手帖』でランドが自らを「見えない」幽霊であるとするのと、まさに一致する事実である。

しかし、「見えない」存在であったとしても、メイドたちは、その雇い主の生活を最も目の当たりにする存在でもある。掃除をしに行く邸宅で、ランドは、ベッドサイドに置かれた写真を見て、幸せそうな夫婦を知る。食べかけの朝食を片付けながら、彼らの体調を知る。ランドはこう記す。

My job was to wipe away dust and dirt and make lines in carpets, to remain invisible. I almost felt like I had the opportunity to get to know my clients better than their relatives did. I'd learn what they ate for breakfast, what shows they watched, if they'd been sick and for how long. I'd see them, even if they weren't home, by the imprints left in their beds and tissues on the nightstand. I'd know them in a way few people did, or maybe ever would<sup>40</sup>).

そして、次第に、クライアントのことを思う心が増していく。

...my clients began to feel like family members or friends I worried about, wondered about, cared for from a distance. I wondered what my clients did in the evenings. Where they sat. What they ate and watched the day before. How they felt day to day. My life had become so quiet. These people gave me something to look forward to, people to hope for and want good things for other than myself<sup>41</sup>).

エーレンライクも、キーウエストのダイナーでウェイトレスを始めて数日で、そこに集う客一人一人に愛着が沸き、肉体労働者が集まるような

ダイナーだったが、「お粗末な環境が許すかぎりの、『素敵なダイナー』にできるだけ近い体験をしてもらいたいと思った<sup>42)</sup>」と、告白している。ランドのクライアントや、エーレンライクの店の客にとっては、そこに働く労働者は透明人間のような、見えない存在であったとしても、働く側の人間にとってみれば、身の回りの世話という大変身近な仕事をする上で、仕事にまじめに取り組めば取り組むほど、相手に愛着が沸いてしまう。しかし、それはむしろ孤独に働く彼女らにとっては、よい効果を生んでいる。他者を思うことで、他者の身を案じることで、明日を迎える動機となり、今日を生きながらえる意味となっていたのだろう。しかし、他者への愛着を持つがために、懸命に働く、という姿勢は、一方で、「感情労働」として近年批判される形態であることにも注目すべきで、今後の研究に発展させるべきであるとも考える。

## 終わりに

かつてのアメリカは「約束の国」や「夢をかなえることのできる国」として、貧しい人々にとってのあこがれの地であった。そのため、19世紀には、多くの移民が世界中からアメリカにやってきて、貧しいながらも希望に満ちた未来を夢見て家族一丸となり、生活を切り開いたり、単身渡米し、一生懸命働き、そこで稼いだ金を祖国の家族に仕送りし、家族は息子がアメリカでの労働で得た金のおかげで、生き抜くことができた。かつてのアメリカでは、人はどんなに貧しくても働いた分の対価が支払われ、そのため、希望を失うことはなかった。20世紀初頭においても、アメリカでは労働者階級はその働きを認められ、労働は理想化されていた<sup>43)</sup>。しかし、1970年代以降、貧富の差は拡大し、労働という努力は必ずしも認められるものではなくなった。エーレンライクは、現ニューヨーク州知事のアンドリュー・クオモがクリントン第2次政権下で、合衆国住宅都市開発長官だった際の「経済が強くなればなるほど、賃貸料を押し上げる圧力も強くなる<sup>44)</sup>」という発言を引き合いに出し、つまり、貧困層は貧困の犠牲者ではなく、繁栄の犠牲者であると指摘する。アメリカでは、貧者と富者は、貧者が安い労働力を提供し、富者が低賃金の働き口を提供する相互依存の関係にあると思われていたが、もはやその関係性はないという。その一因は、貧者と富者が場所やサービ

スを共有する機会が減っているからだという。それぞれがそれぞれに適した学校に通い、富者は郊外のゲート付き高級住宅街に住み、貧者は都市部の壁の薄い集合住宅に身を寄せ合う。富者の子どもたちが貧者について知ることができるのは、新聞を隅から隅まで読んだ時ぐらいだという<sup>45)</sup>。

『メイドの手帖』において、ステファニー・ランドは、エーレンライクが20年前に体験したことを、自身のリアルな生活として経験する。30歳から34歳までの5年間を、どんなに働いても、幼い娘の食事と仕事場に向かうためのガソリン代にしかないくらいの低賃金で他人の家庭のメイドとして働きながら、日々を生き延びた。最低賃金で酷い仕事をして、それだけでは生活費に足りず、ダブルシフトで働くしかなかった。生きながらえることが、人生の目標となるような極限状態の中、ランドは自分の心をフェイスブックやブログで言葉にすることで、自らの心をかろうじて支え続けた。時に政府の公的支援を受けながら、そこに甘んじることなく、自らの生活を切り開く強い意志を持つことができたのは、彼女が養う幼子ミアの存在と、彼女にとっての約束の地モンタナ州ミズーラの存在があったからだ。決してあきらめることなく、辛い時には、インターネットで自らの思いを言葉にし、彼女はついに2012年、ミズーラに移住し、そこでクリエイティブ・ライティングを学ぶ中で、バーバラ・エーレンライクの目に留まり、『メイドの手帖』の出版に至った。そこからの彼女の活躍は目覚ましく、現在は女性の自立や貧困に関する講演などを行い、モンタナ州で新しい伴侶と二人の娘と共に幸せな生活を送っている。

ランドが『メイドの手帖』に描いた生活は、だれにでも起こりうることだ。ミドルクラスに生まれ育ったランドが、貧困の中、自分の言葉で私たちの目の前に提示した生活は、これまでに、多くの貧困層の人々が体験し続けてきた現実だった。しかし、それを表現する手段を持たない彼女たちの声は、社会に届くことはなく消えていった。しかし、ランドは、自らの持つ言葉という最大の武器を持って、社会に対して貧困層の実情を訴えかけた。本論文で挙げた映像作品においても、メイドの存在は「見えない」存在、「幽霊」のような存在として描かれている。その「不可視」性を、文章という強力なパワーで「可視化」したことに、ランドの最大の功績があるのだろう。

2020年から続く世界的パンデミックは、依然として私たちの前に暗い影を落としていくだろう。特に経済的な影響は避けられず、貧富の格差は広がり、人口における貧困層の割合は大きくなることが予想される。21世紀の貧困層の実態を、ランドの手記によって目のあたりにしたアメリカ社会が、この現状とどのようにして向き合っていくのか。アメリカを研究する者の一人として、今後も注視していきたい。

## 註

- 1) ジョーン・C・ウィリアムズ 山田美明・井上大剛訳『アメリカを動かす「ホワイト・ワーキング・クラス」という人々：世界に吹き荒れるポピュリズムを支える“真・中間層”の実体』集英社、2017年 (Joan C. Williams, *White Working Class: Overcoming Class Cluelessness in America*. Boston, Mass.: Harvard Business Review Press, 2007)、8頁。
- 2) デイヴィッド・K・シプラー 森岡孝二・川人博・肥田美佐子訳『ワーキング・プア：アメリカの下層社会』岩波書店、2007年 (David K. Shipler, *The Working Poor: Invisible in America*. New York: Alfred A. Knopf, 2004)、394頁。
- 3) Stephanie Land, *Maid: Hard Work, Low Pay, and a Mother's Will to Survive*. New York: Hachette Books, 2019. (ステファニー・ランド 村井理子訳『メイドの手帖：最低賃金でトイレを掃除し、「書くこと」で自らを綴ったシングルマザーの物語』、双葉社、2020年)
- 4) *The New York Times Sunday Book Review*, Feb. 10, 2019, p.11.
- 5) この見解は、翻訳家の渡辺由佳里がトークイベントで語っている。「シングルマザーの現実が記された『メイドの手帖』を語り尽くす3夜！【第1夜】America 2020 ——『メイドの手帖』から読み解くアメリカのいま」、SPBS 主催オンラインイベント、2020年8月31日)
- 6) Mary Romero, *Maid in the USA 10<sup>th</sup> Anniversary Edition*. New York: Routledge, 2002, p.1.
- 7) バーバラ・エーレンライク 曾田和子訳『ニッケル・アンド・ダイムド：アメリカ下流社会の現実』東洋経済新報社、2006年 (Barbara Ehrenreich, *Nickel and Dimed: On (Not) Getting by in America*. London, UK: Granta Books, 2002)
- 8) J・D・ヴァンス 関根光宏・山田文訳『ヒルビリー・エレジー：アメリカの繁栄から取り残された白人たち』光文社、2017年 (J. D. Vance, *Hillbilly Elegy: A Memoir of a Family and Culture in Crisis*. New York: Harper Collins Publishers, 2016)

- 9) 栗原武士「アメリカ労働者階級研究のいま：その歴史的経緯と将来的展望」『県立広島大学人間文化学部紀要』13、51-62、2018年、51頁。
- 10) 同、53頁。
- 11) 同、55-56頁。
- 12) シプラー、前掲書、16頁。
- 13) 本論文では、他者の家庭で清掃やハウスキーピングをする家内労働者をメイドと表記する。
- 14) ジェームズ・アイヴォリー（監督）『日の名残り』（*The Remains of the Day*）、コロンビア映画、1993年
- 15) ロバート・アルトマン（監督）『ゴスフォード・パーク』（*Gosford Park*）、UIP、2002年
- 16) ブライアン・パーシヴァル他（監督）『ダウントン・アビー 華麗なる英国貴族の館』（*Downton Abbey*）、ITV Studios、2010-2015年。
- 17) エーレンライク、前掲書、24-26頁。
- 18) Land, op. cit., p.142.
- 19) Ibid., pp.240-244.
- 20) Ibid., p.24.
- 21) Ibidem.
- 22) シプラー、前掲書、52頁。
- 23) ウィリアムズ、前掲書、30頁。
- 24) シプラー、前掲書、10頁。
- 25) Land, op. cit., p.150.
- 26) Ibid., p.153.
- 27) エーレンライク、前掲書、99頁。
- 28) 同書、127頁。
- 29) 同書、137頁。
- 30) Land, op. cit., p.69.
- 31) Ibidem.
- 32) Ibid., p.76.
- 33) ジョーダン・ピール（監督）『ゲット・アウト』（*Get Out*）、ユニバーサル映画、2017年。
- 34) ピール監督は、映画のカテゴリーを聞かれ、これは「ドキュメンタリー」であると話している。（*Newsweek*, 2017/11/15）
- 35) 2018年のアカデミー賞では、作品賞、主演男優賞、監督賞と脚本賞にノミネートされ、監督も務めたジョーダン・ピールが脚本賞を受賞している。
- 36) ボン・ジュノ（監督）『パラサイト 半地下の家族』、パルンソン E&A、2019年。
- 37) シャリ・スプリンガー・バーマン&ロバート・ブルチャーニ（監督）『私

がクマにキレた理由』(*The Nanny Diaries*)、ワインスタイン・カンパニー、2007年。

- 38) Plum Sykes, *Bergdorf Blondes*. New York: Hyperion, 2004.
- 39) ジャン＝マルク・ヴァレ他(監督)『ビッグ・リトル・ライズ シーズン1-2』(*Big Little Lies Season1-2*)、ワーナーブラザーズ、2017-2019年。
- 40) Land, op. cit., p.63.
- 41) *Ibid.*, p.84.
- 42) エーレンライク、前掲書、30頁。
- 43) ウィリアムズ、前掲書、11頁。
- 44) エーレンライク、前掲書、228頁。
- 45) 同書、285頁。